

原著論文

大島鎌吉のスポーツ思想に訊く (4)
—日本のスポーツ元年という視点において—
Discussion on Kenkichi OSHIMA's Sports Ideas (4)
: A Viewpoint on the First Year of Sports in Japan

伴 義孝¹⁾

Yoshitaka Ban¹⁾

Abstract

Shortly after the end of the Second World War, Kenkichi Oshima, in his position as a journalist, placed the responsibility for failing to fulfill the Olympic Ideal on the shoulders of the Japan Sports Association. Nevertheless, Oshima accepted a seat as the Association's director, and was appointed for a limited term of seven years, from 1959 to 1965. During his time as director, he successfully fulfilled his duties by running the Tokyo Olympic bidding campaign and building the Tokyo Olympic Athlete Strengthening Headquarters. Oshima declared 1964 as the first "Year of Sports" in Japan, and made significant contributions toward laying the foundations for these projects. In 1963, Oshima left his position as a sports writer for the Mainichi Shinbun, upon reaching mandatory retirement age. After retiring, he continued to wield a powerful pen as a commissioned reporter for the Tokyo head office, where he blamed the Japan Sports Association for their inaction for the rest of his career. Why did Oshima declare 1964 to be the first "Year of Sports" in Japan? Why did he investigate the responsibility of the Japan Sports Association? This paper seeks to examine these two questions, looking at Oshima's work in light of the Olympic Ideal of Pierre de Coubertin.

キーワード TOKYO 1964 人間づくり 文化的デザイン 幻惑

TOKYO 1964, character building, cultural design, dazzlement

1. 緒言

1976年の毎日新聞社が、近代オリンピック創始80年と銘打って、『昭和スポーツ史』を刊行した。大島鎌吉(1908～1985)が「一億人の証言」の一人として論評「金メダル15個を宣言」(以下「1976年大島論評」という)を書いている。論題は大島の本意でなく、編集

者が次の一節から選定したと思われる。

何せオリンピック直前の日本選手団結団式に「金メダル15はとる!」と宣言したものだ。結果はそれより一つ多い16で予想通り米ソに次いで第三位だった。実をいうと最終段階の作戦会議で順調に運べば金23とハジキ出された。だが世界情勢

¹⁾ 関西大学名誉教授(大島鎌吉スポーツ文化研究会主宰)

Kansai University Professor Emeritus (Study Group for OSHIMA's Sports Ideas)

を分析して15以上はせしめられると予想した。（大島、1976、p.227）

文中の作戦会議とは大島本部長の率いた「東京オリンピック選手強化対策本部」（以下「強化本部」という）での任務をいう。大島が日本体育協会の理事に就いたのは強化本部の設置された前後七年間だけで、その間も含め戦後の新聞記者大島は異名「駿台のスポーツボス」をとるほどに、体協批判の記事や論文を書き捲った。体協が1964年まで駿台（お茶の水）に所在したため、関係者からは「理念の足らずを糾弾するボス」と畏れられる存在だった（伴、2018、p.55）。なぜなのか。

1964年10月24日、東京五輪が終わる。

戦い済んで閉会式に臨む時、神宮外苑の道の両側は入場できぬ人々で厚い人垣ができていた。選手団がきのうの感慨を胸に静かに進むと、合間に「よくやってくれた！」の聲が飛んだ。（同前）

1976年大島論評がそう振り返る。本稿なら上述に照らし論題を「よくやってくれた！」と書く。編集者選定の「金メダル15」は近代化「進歩成長」路線の合目的対象論理で、「よくやってくれた」は近代化路線の負の連鎖に対決する反省的实践論理だからである。

本稿ではこの対照的な論理「ものの見方」にも示唆を借りてTOKYO 1964に託された大島意志を副題の視点に立って読み解いてみる。結果としてTOKYO 2020に要請される課題が見つかるはずである。議論では「大島ジャーナリズムの視点」および「クーベルタン関連記述」を直接引用で随所に配し、本稿の問題意識を相乗させて考察する。また戦前、戦中、戦後における特異経験が熟成させた大島「人間づくり」論をも描出してみる。

2. 1964年をめぐる議論の循環

1965年10月31日、体協版『第18回オリンピック競技大会報告書』が刊行され、日本選手団長名で書いた大島随想「世紀の大会に参加して」が載っている。内容は1976年大島論評の問う反省的实践論理について詳述してあ

る。1964年時点の大島実感に訊こう。

沿道の老人が張りのある大声で叫んだ。「大島団長！ よくやってくれた！ 日本民族の若い力をこの目に見せてくれた！ ありがとう！」。その声は、「戦後の教育の…」と続いた涙声でぶつりと切れてしまった。（大島、1965、p.4）

老人の声に「オリンピックを東京でやってほんとうによかった！」と戦前からの足跡を顧みた。そのさいの大島展望に注意したい。

オリンピック後のスポーツの国民的振興がどうあるべきか。オリンピックの反省が世界のスポーツの大きな振興に役立つべきだとする、クーベルタンの遺志、オリンピックの意思を尊ととするならば、わが国でも問題の焦点がすでにもうここに移っている。（同前 p.6）

こうも書いて日本スポーツへの課題を提起した。1959年5月26日、IOCミュンヘン総会でのTOKYO 1964招致決定時に、会場での大島は1964年を「日本のスポーツ元年」に定めたのであった。大島の体協理事就任は直前の1959年4月1日である。なぜなのか。

東京招致運動が本格化してきた59年春、田畑氏からボク（大島）にモスクワはじめ東欧のIOC八票を獲得するため飛んでくれないかと要請があった。戦前の第12回オリンピックを日中戦争で返上した苦い思い出があったせいだろう。もう一度日本での思慕がいつも心の底にあった。一方子供たちにどうしてもオリンピックの姿を見せたいという願いがあって論争を離れ要請を受けた。（大島、1976）

上記の論争とは1949年以来続く「蚊帳の吊り手論争」（大島造語）のことである。IOCの田畑政治は尖端「選手」主義で、大島は基底「大衆スポーツ」主義なのだが、要請を受けて大島「駿台スポーツボス」と田畑「日本体育協会」の七年間続くオリンピック休戦が成立しTOKYO 1964へ向けて邁進する。

1965年3月31日、体協版『東京オリンピック選手強化対策本部報告書』が刊行された。

残務整理を見届けて同日付で体協理事を辞去した大島は1965年4月1日から大阪体育大学の副学長となる。1963年11月9日に毎日新聞社を定年退職したのちも嘱託記者として筆鋒を揮う。斯くして1966年内の執筆論文「日本体協のビジョン」が辛辣に書く。

体協はスポーツ諸団体と地方体協で構成されている。スポーツ団体は良い選手をつくってオリンピックや国際競技に出ることで頭が一杯である。そのため体協は定款にある「国民体育の振興」など考えたこともあるまい。(大島、1967、p.94)

併せて明治期の外来文化として出立した日本スポーツの中央集権構造をも指弾する。

地方体協は国民体育大会に血道をあげている。これまた地方的選手をつくって何としてでも国体で得点したいと歯をくいしばっているに過ぎない。もっとも言い訳はあろう。それは「カヤのつり手の頂点を上げれば底辺が広がる！」なのだが、問題は重点の置き方である。(同前)

しかるに1965年以降の体協は「東京五輪の夢をもう一度」と「金メダル至上主義」に依存し大島進言に聞く耳をもたなかった。

いまの体協は政策不在のまま世の中を見やっているに過ぎない。こんなことを言うのは、社会との結びつきの中で初めて体協の存在理由があるのに全然努力の跡が見られないからだ。(同前 p.95)

大島は理念(存在理由)の不問を許さない。そうであれば本稿の議論もまた1964年「日本のスポーツ元年」をめぐって循環する。

3. 「人間づくり」という視点

1964年10月10日の東京五輪開会式直前に大島が対談で「野心」について語った。

選手強化の仕事をやりだしたとき、何か一つの野心というか、期待、希望そういうものがあつた。それはスポーツにおける日本人の持っているポテンシャルを最終的にまで開発したらどうなるかという考えだつた。(大島対談、1964、p.65)

強化本部は「精神的基調」を定め、「5ヵ年計画の二本の柱」とした。ひとつに「日の丸を上げよう!」という「国民感情に応える選手をつくる柱」で、他はホスト国として「外国選手をもてなすに足る選手をつくる柱」である。前者はスポーツ科学の導入で一定の目途が立つ。だが後者のためにはスポーツ哲学の間う「人間づくり」の視点が欠かせない。ともあれ1959年11月1日発表の大島論文「竹やり精神の選手強化」が叱咤をとばした。

計画的な選手づくりは、強い基盤をつくって出発とし軌道が引かれなくてはならない。東京オリンピックまでの5年間はギリギリの時間である。陸上競技では種目の技術はある程度理解が深くなった。だがトレーニング法と指導技術については全く闇雲である。(大島、1959、487頁)

当時の日本スポーツは「反復練習とインターバル練習が区分もされず横行して」いて「尊い青春が伸び悩み潰れてしまう」状況にあった。大島「日本のスポーツ元年」構想はかかる状況改革をも文化的デザイン「人間づくり」の土台に据えたのである。一方で「陸連には体育学会の著名人もいるのだが」と例示したうえで現実把握のもとに無知を指摘する。

中学生の全国通信競技の種目を見れば直ぐに解る。男子ではこともあろうに400M、3000M、三段跳が含まれている。ソ連はスポーツ政策を強力に押し進め選手づくりに極めて熱心な国だが、この国でさえも13歳～15歳の子供にこの激しい種目をやらせていない。(同前)

大島は世界基準で判断し「見習うべき」は誰からでも尊重する。さらに同論文では「いま一番大切なことは体育概論(スポーツ哲学)の確立とその実践である」と見積もって反省的実践論理の視点から注文した。加えて競技団体の首脳陣を批判する。多くは「競技団体というお人よしばかりの世界」に潜入し「タダで海外旅行でもしてやろう」と利用するだけで「選手のことなど意に介さない」と不作為責任を暴いた。東京五輪招致決定後も「選

手強化の必要」と「何を目的」に「どんな方針」で「何を内容」とするのか無策のままだった。大島が実態を問ひ糺して憂慮する。

世界記録という柳の枝は樹の成長と共に一日一日高くなってゆく。それに跳びつく蛙はだんだん疲れてくる。東京オリンピックが近づくほど蛙の精神が血相を変えてくる。選手強化委員はそのうち本当に竹やりを振り回しそうだ。（同前）

この諧謔は第二次世界大戦（1939 - 1945）へ青少年をも追い込んだ「竹やり精神」を指弾している。近代化路線の最大の過誤は戦争で、最大の犠牲者は青少年である。斯くして戦後の大島は、青少年を「負の連鎖」から救い出すため、命題「スポーツで何ができるのか」を掲げ、駿台スポーツボスとして「理念なき体協」に対決した。実に対決は生涯に亘って続く。二ヵ月後の1960年1月18日、強化本部が設置され、改めての要請「責任者就任」を受諾した。その存念が異色である。

日本のスポーツは依然として経験主義的で科学的裏付けをもっていなかった。さらに基盤であるべき青少年スポーツの振興が政府の間違った政策で横道を走っていた。これをこの機会に何とかできればと考えた。（大島、1979、p.123）

大島において青少年スポーツとは「人間づくり」の現場にほかならない。前出の1964年対談に「野心の真相」を語っている。

いままでの日本のスポーツ界にはいなかった別の、次元の高い人間をつくらうじゃないかというので選手強化本部では「人間づくり」と言った。（p.65）

近代合理主義は事物を対象論理で捉え利用価値とか達成目標とかを尺度にする。他方で大島箴言が戦争責任国の反省点を総括する。

「技術革新（近代化路線）は双刃の剣である。プラスの増はその分だけマイナスを生む。日本ではプラスに性急で戦前も戦後もマイナス防止をネグった」

先に大島指摘「タダ乗り論」を借りて競技団体首脳陣の次元の低さに言及しておいた。そ

のさいの大島は「プラスの増」を利己的に追求しスポーツをも対象論理の利用物として消費する近代合理主義を批判したのである。そもそも大島の問う「次元の高い人間」は全一的人間形成を標榜していて端的である。

スポーツというのは感情の世界だ。いままで西欧文化を吸収しなければならなかったのも、知育とか知性を高く評価しすぎて、感情というものをネグレクトしすぎた。（大島対談、1964、p.69）

感情の交錯する生活世界で人間性は培われる。この原点が大島「人間づくり」構想の指標である。大島は反省的実践論理「マイナス防止」を過小評価する戦後を凝視する。1964年10月24日の大島が傾聴した老人の声「戦後の教育の…」は対象論理「物質主義」を助長する知育偏重教育を難詰したのであった。

1964年の大島対談は日本経営者団体連盟の機関誌『経営者』に載った。実にマイナス防止をネグってきた「経済」をも糾弾したことになる。大島ジャーナリズムはいかなる機会をも捉え不作為責任があれば活字に残す。対談では「政治」への追及も忘れていない。

二年ばかりして池田さんの人づくりが出てきたが、（偏向しないよう）そういう一種の野心、期待があった。（同前 p.65）

首相の池田勇人は所得倍増論を掲げ「人づくり」を柱とした。1962年の池田政権は中教審へ「人づくり政策と大学管理制度の再検討」を諮問したのだが、目的は人材養成を大学教育に組み込むことにあった。総じて所得倍増論に幻惑される「プラスの増志向」の常態化「99%」へ対決するためには、異端児「1%」の野心とも譬えるべき覚悟が必要になる。大島「人間づくり」構想はこれほどまでに挑戦的で高邁である。なぜ大島視点は、TOKYO 1964に向けてこうまでも透徹したのか。

4. 透徹の源泉

1945年8月1日、足掛け七年間ものベルリン特派員を全うして大島記者が生還した。

内地にいたら赤紙一枚の徴兵、太平洋の

孤島かビルマかで戦死していたはずだ。そう思うと「この死に損いは、やりたいことは何でもやってやろう！」とその後の生き方を決めた。(大島、1982、p.176)

8月6日は広島に、9日は長崎に原爆が投下された。15日の終戦、大島記者の発見したのは戦争責任国日本の惨状である。斯くして大島は命題「スポーツで何ができるのか」を論理的締結「生き方を決めた」の柱に据えた。こうした経緯には第二次世界大戦の顛末すべてを現地で肉化させてきた大島「死線のドイツ」経験が働いている(大島、1947b)。

1945年5月1日、ヒットラーはベルリンと共に数奇な一生に終止符を打った。彼の亡命説、潜伏説等は未だにあるがベルリンを枕に戦死する以外の死に方を彼に求めることは不可能であろう。ベルリン陥落に引き続く5月8日の全軍降伏をもって、ヒットラーのドイツは名実共に永久に地上から姿を消した。ヒットラー来たり、ヒットラー去れり、されどドイツ民衆は残れり。廢墟と化したベルリンの至る所にロシヤ語とドイツ語の標語が掲げられている。(大島、1947b、p.4)

1947年1月15日、大島処女出版本『死線のドイツ』が世に出た。上記は同書に改めて刻印した現実把握である。1982年の大島が1945年の現実把握を再確認するためにベルリン陥落を回想している。なぜなのか。

とどのつまりは獯猛なソ連兵(シベリア軍)の砲撃とベルリン攻略戦だった。ソ連のベルリン入城の第一報をうちたいばかりに踏み止まったのだが、東からの砲撃を避け路上の死人をかきわけてたどりついた電報局ではただ一人の局員が「東京につくかどうか判らない」とツブやいた。(大島、1982、p.175)

1945年8月2日に東京本社へ帰社した大島の第一声は「第一報は届いたか」である。本稿は上掲の1947年記事を「届かなかった第一報の再現」だと見定めている。当時はGHQ(連合国軍総司令部)の民間検閲があつて迂闊な

ことを書けない占領下にあつた。

戦時下の6年間ではカール・ディームとの対話基地「ドイツチャンネル」を構築した。またドイツ語の練磨も兼ねディーム編集の1936年刊行ドイツ語版『クベルタン オリンピックの回想』(以下「クベルタン本」という)を読み熟した。ディームとの対話がスポーツ思想を熟成させ、クベルタン本がオリンピック観を確立させた。実に戦時下での特異な境涯が大島視点を透徹させる源泉だったのである(伴、2013)。戦後は特異経験を懐刀に駿台スポーツボスに徹した。1947年の大島著書『死線のドイツ』が予見する。

日本には近代国家が不可欠の要素とする鉄と石炭があるか。答は「否」である。ドイツに生きるためにあの豊富な鉄と石炭の使用が許されるならば、それを基礎とするドイツ工業の再出発はスタートの出遅れを取戻すだけの十分な潜在力をもっていることを認めねばならない。日本の明日は今日の樂觀をもって断じて儉安を許さぬであろうことは今から既に明瞭である。(大島、1947b、p.53)

大島「死線のドイツ」経験は世界観「もの見方」を根本的に変え箴言を生み出した。

「技術革新(近代化路線)のマイナス防止を怠るな! 怠る儉安を許すな!」

1947年の大島は、資源が乏しいのなら、「明日」を担う「青少年」の「人間づくり」を「怠る儉安を許すな」と宣言したのである。こうして日本体育協会へ期待を寄せつづけた。

いま(1966年)の「黒い霧」に包まれた汚濁しきった政治にどうにも期待できない。そうなると体協を政府に対する圧力団体化し、それに見識をもたせて押しまくる以外に方法がない。そのためには明確な理念を注入して世界観をもたせ社会的使命に邁進する勇気を与えなくてはならない。それにつけても労働者スポーツ連盟や新体育連盟の誕生は何が原因であつたのか。それは体協の無為無策にあつたことをまず反省してかからなくてはな

らない。何れにせよ、体育・スポーツの果たすべき役割がいまぐっと前面に押し出されてきた。（大島、1967、p.96）

東京五輪後の大島はこうも書いた。実に体協への対決姿勢は期待すればこそその反語「救いの手」だと紙背が語る。こうした大島透徹の背景にはドイツモデルが実在している。

5. オリンピズムの根本原則

1945年8月2日、戦争責任国ドイツは米英ソ仏の四ヶ国分割占領下におかれ、1949年から東西に分断された。そのため西ドイツのスポーツが組織的に始まるのは、日本での1945年末に遅れて、民間団体DSB（ドイツスポーツ連盟）が1950年に創設されてからである。だがやがて「世界に一頭地を抜く成功例」となる（伴、1994、pp.157 - 193）。創設以来のDSBは総合政策を展開してスポーツを社会の潤滑油に昇華させたのである。

原動力はいずれもディーム思想に先導されていて三段階がある。第一に「スポーツ少年団興隆期」（1950年代）で、DSBが将来を青少年育成に担保するため力を入れた段階である。第二に「ゴールデンプラン推進期」（1960年代）で、戦争で荒廃したスポーツ施設の充実マスタープランを掲げ効果を発揮した段階である。第三に「スポーツ・フォー・オール作戦（トリムアクション）展開期」（1970年代）で、運動不足症撲滅運動として一般市民の健康願望に応えた段階である。

戦後の大島「スポーツで何ができるのか」構想は民間団体DSBにおける文化的デザイン「スポーツ総合政策」を日本へ紹介し土着させるための実践課題とした。このさい西ドイツ政府の姿勢「金は出すが口は出さない」に瞠目し、それがドイツ敗戦革命の一環政策に帰結すると看破して、戦争責任国の見習うべき手本「あるべき理念」とした。それだけでなく大島は「手本の原点」を直視する。

スポーツの哲人カール・ディーム博士はクベルタンと肝胆を照らし合う仲の人であったが、この人が長い年月をかけてよ

うやくクベルタンの思い出の記を集め、これを編集して初めて世に贈ることに成功した。（大島邦訳書 p.3）

上記の「これを」はクベルタンが1931年にフランスの新聞に連載した「オリンピックの回想」をいう。このクベルタン回想が新たに書物として編集されクベルタンとディームの意志で出版された。それが1936年のドイツ語版である（John、1936）。1936年の第11回五輪ベルリン大会は、ヒトラー政権「ユダヤ人迫害政策」に対決して、近代オリンピック史上初のボイコット運動に曝されていた。回避するには環境整備「文化的デザイン」を工夫してヒトラー政権を諫めなければならない。この経緯にはクベルタン本出版計画も役割を担っている。こうしてディーム事務総長の率いるベルリン五輪組織委員会の展開した環境整備が結実し、1935年11月5日にヒトラー公約「大会準備中と大会期間中のユダヤ人迫害の抑制」を取り付けて五輪開催の目途が立った（IOC、1994、p.247）。

一連の環境整備はヒトラー政権の成立した1933年1月30日に始まっていて、オリンピック運動史に残る歴史的現実問題である。戦後の大島がその成果と内実を伝えている。

オリンピックプログラムを今日の規模に整理したこと、スポーツと音楽と芸術を結びつけ開会式当日ベートーベンの第九シンフォニーを演奏したこと、オリンピアとオリンピック都市を結ぶ聖火リレーを実現したこと、オリンピックの鐘を着想したことなど何れもオリンピックの理想を実現する試みだった。ベルリンオリンピック大会以来、オリンピックの規模が一変したのは、研究者、オルガナイザーとしてのディーム博士に理念があり、その理念を実現するだけの力があったからである。不幸にしてこのことはそのまま評価されていない。ヒトラーが国威を宣伝するために行った厚化粧がディーム博士の意図するもの以上に人目を引いたからだ。（大島、1955、p.428）

成果はディームとクーベルタンが1933年から1935年にかけて度重なる会談で構想した文化的デザインに負うところが大きい。

「…わたし（クーベルタン）の聞くところでは、第11回オリンピックではベートーベンの第九シンフォニーの最後の節で開会し、それが大合唱団で斉唱されるそうです。この節はハーモニーで人間のもつ神性と結びついてるように思われます。そこでわたしの願うことは、この大合唱が青少年の努力する力と青少年の喜びを表現し、将来オリンピック競技が開かれる度に斉唱されるようになることです…」(大島邦訳書、1962、p.206)

この「くだり」は1935年8月4日にクーベルタンがディーム招聘に応じてベルリンで発表したラジオ演説「近代オリピズムの哲学的原理」の一節である。演説自体も文化的デザインの一環として企画された。演説ではオリンピック競技を祝福する意義を古代までに遡って説き、オリンピックを担う榮譽を見逃してはならないと訴えた。ヒトラー政権へ聴かせるためである。こうして前出の「ヒトラー公約」が結実することになる。

現今のオリンピック憲章には「オリピズムの根本原則」が明示されているのだが、クーベルタンの1935年ラジオ演説が下敷きになっている。とりわけ2004年からは「オリピズム」を身心一元論のスポーツで培う「生き方の哲学」の実践思想であると定義して第一原則に据えた。理由は、物質主義への益々の傾倒を危機問題として捉え、スポーツの内発させる「努力する喜び the joy of effort」を以て導き出す「教育的価値・社会的責任・倫理的規範」の涵養に照準を定め直すためである。その経緯は上述のクーベルタン演説で主張した「青少年の努力する力と青少年の喜び」に由来する。他方で戦後のドイツスポーツはオリピズムに忠実である。なぜなのか。

6. ヨーロッパの危機

大島邦訳書でのディームが19世紀末のクーベルタンの「人となり」を語る。

「…クーベルタンという人間の中に、彼が創った語オリンピック主義 Olympismus の復活者だけを見付けようとするのは誤りである。むしろ真新しい近代教育をうち立て、その教育によって社会を改変し、社会を新しい軌道の上で走らせようと願った人であると見るのが正しい…」(大島邦訳書 p.9)

真新しい近代教育とは身心一元論のスポーツ教育に託す教育改革をいう。19世紀中葉には近代哲学「心身二元論」に対決して負の連鎖の克服「マイナス防止」を標榜する「生の哲学運動」が始まるのだが、クーベルタン実践論理も同じであった(伴、2018、p.52)。とはいえマイナス防止の欠如するとき人心を幻惑させる。斯くして21世紀に至ると幻惑の増幅「危機問題」がIOCをして現代版「生き方の哲学」運動に目を向けさせた。ただしIOCもNOCも空回りしてはいないか。それほどまでに「幻惑の根」は深い。

このさい危機問題を歴史的に確認しておきたい。遡れば1925年のクーベルタンがIOC委員長を辞去し、自らは知育偏重「危機状況」の打開へ向け「教育の国際的改革」へ転出した経緯がある。ディームが補足する。

「…それ以降クーベルタンはオリンピック会議にもオリンピック大会にも姿を現わさなくなった。彼は自分が出席することによって自ら推薦した後継者にワキ役を演じさせられなかったのである…」(大島邦訳書 p.12)

だがオリンピック運動に関する助言を欠かすことはなかった。ならばディームとの三年間におよぶ異例の会談でみせたクーベルタンの意志は何故なのか。1935年9月15日、ヒトラー政権はユダヤ人の公民権を奪う「ニュルンベルク法」を制定した。翌1936年、ユダヤ系のフッサールが『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』を上梓して生の哲学運動と同一視点から近代哲学と近代科学の不備を批判した。かかる経緯とクーベルタンの意志を複合させて読み解けば、「1936年」に向けてクーベルタンとディームの企図したマイナス防止施策としての環境整備「文化的デザイン」の「狙

いと成果」が検証できる。

ヨーロッパの危機は「近代人の世界観全体が実証科学に負う繁栄によって徹底的に幻惑されていた」ために凝結した（フッサー、1974、p.20）。しかし「超越論的現象学」も、生活世界を対象論理で読み解かざり、学問論を超えることはできない。実にこの矛盾の克服を試みたのがクーベルタンであって、反省的実践論理のスポーツへの期待である。本稿では1933年のクーベルタンがヒトラーに対決し隠棲中の身ながら再び立ち上ったと見定めておく。そうであれば1935年ラジオ演説はヨーロッパの危機へ対決する文化的デザインだったことになる。この観点からも演説の発信した「もうひとつの核心点」について議論を深めておく必要があるか。

とはいえ二つの世界大戦はドイツに戦争責任がある。ドイツスポーツがオリムピズムに忠実なのはその自覚のためなのだが、上述の環境整備の問題を見落としてはならない。

7. 尖端と基底の環流構想

1961年の強化本部は特別講師としてスポーツ哲学の泰斗ディームを大島差配で招聘した。全国展開での公開講演会だったので、指導者・研究者・新聞記者など多くが学んだはずである。そのさい事前に二点を注文していた。ひとつはオリンピック標語「より速く、より高く、より強く」の解釈問題で、他はオリンピック競技の位置づけ問題である。

近代化路線の派生させる幻惑は概念をも歪める。そのため標語は近代合理主義の相対的な競争原理に倣って「世界一」という達成目標に組み替えられてしまった。同時にオリンピック大会も「世界最大のスポーツ行事」と認識された。ところが講演でのディームは既成概念を否定し、標語の問う比較級「より」について、青少年個人々の身体的能力を高揚させ精神的、道徳的、心的に高めるための象徴だと説いた（ディーム、1961a、p.69）。さらには「オリンピックは人間文化の祭典」であって「スポーツだけ」にとどまるのでなく「単なる世

界選手権大会ではない」と特異性を強調した（ディーム、1961b、p.7）。聴衆は戸惑いのもとに傾聴したはずである。

一方で既成概念は容易に打破できない。そこでディームは1936年のクーベルタン本を編集しなおし、再版本『Pierre de Coubertin Olympische Erinnerungen』として1959年に出版した。1961年の講演ではその大島邦訳書が翌1962年に出版されるので読み合わせることを奨めたはずである。同書には大島「尖端と基底の環流」構想に相当する文化的デザインの原形が明示されている。実にクーベルタン理念「スポーツ普及の法則」が、下記引用のように図式化されて、公式に発表されたのは1930年9月13日開催の「ジュネーブ国際教育会議」においてであった。

「…100人が体育をおこなうには、50人がスポーツをおこなわなくてはならない。50人がスポーツをおこなうには、20人が専門のスポーツに専心しなければならない。20人が専門スポーツに専心するには、5人が素晴らしい技能を完成する能力をもっていなければならない…」（大島邦訳書 p.199）

土台となる環境整備「5人」を実現するには仕掛けが欠かせない。こうして1892年の青年クーベルタンが青少年の内なる活動欲を鼓舞するため「近代オリンピックの復活」を呼びかけた。このさい土台「5人」のあり方は、逆立ちピラミッドに譬えるとき、不安定な基底構造になる。その上に「20人・50人・100人」を順次積み上げるのは物理的に不可能に思えるのだが、生活世界の環境整備のあり方次第では可能に転じる。クーベルタンはその可能性に理念を被せたのである。

ときにスポーツは時代相に合わせて姿を変える。例えば19世紀の欧米ではクーベルタン以前に「オリンピック」と名乗る見世物が流行した。それがためにクーベルタンは、1935年ラジオ演説でも、新しい文化「近代オリンピック」の創造に腐心した経緯を語る。

「…わたしは40年前（1892年）この教義を近代オリンピック競技に移し植えられると信

じた。その時、人々はわたしが幻想にとりつかれたのだと考えた…」(大島邦訳書 p.203)

上記に問う「教義」とは「より速く、より高く、より強く」を追求する実践原理「内発する精粹性」を言い当てている。ところで大島邦訳書では、一般的な訳出「より」に代え、内発要因を賦活する意識「及ぶかぎり」を充当した。この名訳を読み捨ててはならない。

「…スポーツの帰依者たちは拘束のない自由を求めている。それでここにひとつの標語ができています。キティウス Citius、アルティウス Altius、フォルティウス Fortius、すなわち“及ぶかぎり速く”、“及ぶかぎり高く”、“及ぶかぎり強く”であります。この標語はあえて記録を破ろうとするすべての人に与えられているのです…」(同前)

実にこの名訳が1935年ラジオ演説の語る「もうひとつの核心点」である。三点を補足したい。拘束のない自由とは、ヒトラーの圧政批判も内意している。及ぶかぎりとは、相対的な競争原理でなく青少年の内面的な向上を期待している。すべての人とは、現代流に言えば尖端の「5人」だけでなく基底「100人」に連なる「20人と50人」の青少年すべての環流を表意している。クーベルタンは身心一元論「スポーツ」実践の帰依者が漸増する環流構造を「一本の鎖」に譬えて「互いを結び連鎖させる」ための仕組みだと表現した(大島邦訳書 p.199)。そうであれば、戦後日本での大島「尖端と基底の環流」構想は如何に展開されたのか。議論はこの問題を整理すべきである。実に1962年の大島は、反偷安思考の随想「もう一度省みよう！」を書いて、「東京オリンピックを迎えるに当たって理念に向かって努力が要請されている」と体協首脳陣へ檄を飛ばした(大島、1962、p.87)。なぜなのか。

8. 1949年における変転

クーベルタン指標「100人」は「青少年すべて」にスポーツ教育を浸透させるための先見の問題提起である。敷衍すれば現代の世界共通語「みんなのスポーツ Sports for All」を

先取りしている。しかも中間層の「50人と20人」を連動させる環流型理念である。実は民間発意の「みんなのスポーツ運動 Sports for All Movement」が世界同時現象として発進するにはオリンピック運動の提唱から数えて1970年代後半まで80年間を要した。まして慣用句「sports for all」がオリンピック憲章に登場するのは1981年IOC総会以降である。こうした隔絶は、なぜ起こるのか。

19世紀末にあつては、クーベルタン理念を社会へ認知させるため、出立点として人心を惹きつける画期的な文化的デザインの創設「5人」が不可欠だった。しかしこのクーベルタン「逆立ちピラミッド」構想は、現代社会にあつても、何事も対象論理で捉える政治・経済・教育の立場から「プラスの増志向」の利用物として逆立ちのままに捉えられている。譬えるなら「みんなのスポーツ」を基底にしてオリンピックへ順当に積み上げる環流型ピラミッド構想は、現代ドイツを例外として、世界的にまだ認知されていないのである。ところが戦後1947年の大島は違った。

われわれがスポーツ界に声を大にして叫ぶことは「スポーツは大衆に基盤をもって育成促進せよ」ということだ。崩れかけたピラミッドの尖端だけをながめて回顧し、弱弱しく「復興」をさけぶ愚人の夢を縋ってはならない。心ある者は過ったスタートを切り直しピラミッドの基底を固めるため「一」から始めて「れんが」を運ばねばならぬ。(大島、1947a)

1946年には体協がGHQを説き伏せ新概念の第1回国民体育大会(尖端)を開催させた。そのころ大島先導で民間のレクリエーション協会設立計画が進み1947年に成就している。一方で戦後混乱期のなか第2回国体の招致先が未定のため、大島「救いの手」が故郷「石川県」に働きかけて受諾させた。併せて第1回全国レクリエーション大会(基底)との連携開催を実現させたのである。ここに世界に先駆ける大島「尖端と基底の環流」構想が始まる。(伴、2013、pp.243—258)

構想が永続しておれば日本のスポーツ元年は1947年に始まったはずである。だが重なる事案が影響して1950年に頓挫した。1949年8月16日、戦後初の国際進出で全米水上選手権大会（ロサンゼルス）の招待選手古橋広之進が1500_{ヤード}自由形で驚異的な世界記録「18分19秒」を樹立した。世界のメディアが「フジヤマのトビウオ」と絶賛し、日本では「一般市民も鬼の首でもとった」ように国際社会から隔離されていた占領下の暗い世相にあって歓喜した（同前 p.45）。

日本の焦燥が先進資本主義国家に追いつこうとした明治維新以来の気狂いじみた努力が、ほとんど意味がなかった、方向が逆であったと解った今日。再び意味もなく昔と同じ方向へ眼を向け、国際試合とかオリンピックとなると旧思想に囚われがちなのだ。（大島、1949、p.46）

斯くして時代精神が戦前思想「追い越せ、追い抜け」へ変転した。趨勢を累乗させたのが1950年6月25日に始まる朝鮮戦争（1950—1953休戦）での特需景気である。時の首相吉田茂が「これは天祐だ」と評したと伝えられている。かかる倒錯した経済復興への願望が高度経済成長の出発点となって社会へ蔓延するなか、プラスの増志向が囚われがちな幻惑として増殖する。そこに隘路があった。

1975年のフーコーがこの幻惑と隘路の問題を指摘して「規律と訓練のテクノロジー」と表現した。即ち近代合理主義「プラスの増志向」は成長路線を助長するための隘路「規律と訓練」として作用し、その拘束がテクノロジーとして人心を支配し幻惑「危機問題」を加工する。フーコーは第二次世界大戦後に急進したテクノクラシー（技術革新主義）の過信「危機構造」へ警鐘を鳴らしたのである。ところが1949年の大島はフーコーに先駆けて反省的実践論理の視点から世に問うた。

古橋の世界記録は人類最高の能力を実現した点、自分の潜在する能力を引き出して、その支配する世界の広大さを世に問うた点で大きな文化的意味をもつもので

あると思う。さてこのとき日本のスポーツと体育が重大な岐路にあることは明らかだ。（大島、1949、p.47）

その前段に本音「文化的意味」を説く。

個々の人間が別の未知の世界に（及ぶかぎり）踏み込んでゆく、潜在する無限の能力を（及ぶかぎり）伸ばしてゆく、自己の発見と共に他の世界を（及ぶかぎり）探究してゆく。ここにスポーツの価値があるのではなからうか。青白い輩が文化性なしというスポーツに文化の二字を冠したのも、実はここに論理的締結があるからである。この意味でスポーツ文化が今ほど強調されることはない。（同前）

こうまでも先鋭的なスポーツ文化論を書けたのは何故なのか。理由を特定したい。1949年4月24日、I O Cローマ総会が1952年ヘルシンキ五輪への日本参加認容を明言した。明言を契機に体協が旧思想「尖端主義」へ逆走したのである。あたかも戦後初の国際進出で古橋快拳が現前した。かかる状況が複合して三ヵ年続いた国民体育大会（尖端）と全国レクリエーション大会（基底）の斬新な連携開催に1950年から終止符が打たれた。

（ドイツなど）独立せんとする国々が国民の身体との結びつきに真剣さを示しているとき、日本だけが例外である点に実は焦りを感じている。今こそ優れた体育家やスポーツマンがまなじりを決して先頭に立つべきではあるまいか。（同前）

この論文の掲載誌『体育』は東京教育大学体育研究会の編集である。編集後記が1949年をして「スポーツ界の大躍進と大学体育の実施で偉大な足跡を残した」と特筆する。前者は「古橋快拳」を、後者は「大学教養体育必修制度の導入」を指示している。しかも1950年には日本体育学会が設立された。このようにスポーツ理念を浸透させるための環境整備も揃いはじめた。ところが1950年を契機に高度経済成長が始まって、日本体育協会（文化界）も近代合理主義へ同調する。斯くして蚊帳の吊り手論争が始まるのだが多勢は尖端主義へ傾倒

し、基底優先論は大島だけだった。そこに変転という隘路がはびこる。時流に乗った「学界」も例外ではない。

米国のたくましい生活力と機転に幾らかの創意を加えてでき上った体育、スポーツの、主として技術に幻惑された目が、もつと本質的なものを求めて注がれるとき、端的に言えば普遍化されたドイツ哲学的なもの、さらにはギリシャ哲学的なものにその源が発していることを発見するのである。(大島、1955、p.426)

このように戦後日本では、文化導入の窓口を米国へ向けた。さらにはアメリカ信仰「規律と訓練のテクノロジー」が学界や文化界へも根付いてしまった。こうして尖端至上主義が、戦争責任国日本の然るべき敗戦革命「マイナス防止の追求」を放棄させて、結果的に2019年状況にあっても横溢している。

9. 1964年をめぐる文化的デザイン

この横溢の放任が大島箴言「儉安を許すな」の掃討標的である。放任問題はTOKYO 1964に関連してどのように進捗したのか。論点を1976年大島論評の示唆に探ってみる。

経費のことだが、1959年ミュンヘンのIOC総会で東京と決まってから5年間、総経費は組織委員会と選手強化の直接費が125億円、新幹線など関連事業の間接費が1兆800億円だった。これを時価にすると300億円と2兆5千億。

大島は東京五輪の経済効果を数量化して説明した。論題「金メダル15個」も数字である。前者は量的に価値評価する近代合理主義の幻惑に対する皮肉であって、後者は量的判断に敏感な世間を意識して編集者が選定した。こうして1970年代には「数字」が雄弁になる。1976年大島論評の結語に注意したい。

思うにカヤの吊り手論争は双方が両極端に立って互いに主張を譲らなかったのが延々とつづいた。そして中間地帯が大きく広いことに誰も気づかなかった。

実に中間地帯とは、クーベルタン「逆立ち

ピラミッド」構想に倣うとき、「50人と20人」に相当する社会構造をいう。この構造改革には文化的デザインが必要で、大島強化本部は二段階を策定した。第一に「選手強化5ヵ年計画」で、第二に五輪後の「長期20ヵ年計画」である。まず強化本部『報告書』の語る「5ヵ年計画」に訊きだしておく。

多くの競技者は持って生まれた潜在力が開発されぬままに終わっている。ことにトレーニング理論が未熟で、方法論的作業が教育学の原則にそわぬ場合、なおさらである。(日本体育協会、1965、p.64)

教育学的視点は大島の真骨頂である。そのため具体策の展開はコーチ制度の導入とコーチの育成、トレーニングと技術の理論と方法論の確立などに代表された。特異なのは報告書の「総論」と「反省と将来の問題」など主要記述が大島執筆であって、成果「金メダル16個、世界第三位」をひけらかす記述は一行もなく、「488頁すべて」が日本のスポーツ元年構想へ向けての指針になっている。

次に20ヵ年計画に訊いてみる。大島は5ヵ年計画を「インスタント施策だった」と総括したうえで、二十年後を見通し「米ソと対抗できる対策が必要だ」と展望した。対策とは、金メダル争いだけでなく、戦勝国論理を強弁する米ソに備え、然るべき敗戦革命の追及すべき問題をいう。このさいの大島は1964年の「6歳」が「26歳」になることを見越して希望を託したのである。(同前 p176)

わが国の教育制度がこれでいいのだろうか、これは十分検討すべき問題である。すなわち社会的、教育的に、体育・スポーツが文明国においてあるべき地位を確保するために、体育協会が戦いとる態勢を固めるべきでないか。次に科学的研究機関の創設と指導者の養成、発達しつつあるスポーツ少年団の育成、学校と職場スポーツの組織化、トレーニング施設の造成並びに機能的使用などがある。最後にスポーツ振興法の虚実性の排除と体育行政の一元化である。(同前 p.177)

念のため1964年1月28日の大島は、第46回国会参議院東京五輪準備促進特別委員会で「目標（15以上の金メダル）」を説明したとき、五輪後の「終戦処理」に向け「日本の体育スポーツの新しいスタートを確立する特別委員会で諸問題を検討中」だと報告してその協力を要請している（同前 p.151）。

大島言質は絶妙である。上述の終戦処理がそう、東京オリンピック担当大臣の河野一郎が応えた。1964年12月18日に河野主唱のもと「国民健康体力増強対策」が閣議決定され、総理府はじめ関係11省庁と200余の各種民間団体加盟のもと国民運動の意志決定母体「体力づくり国民会議」が翌年3月25日に設置された。だが発進には1966年3月28日設立の「国民体力づくり事業協議会」が待たれた。ところが1965年7月8日に河野が急逝する。（伴、2013、pp.491—492）

大島回想が「河野一郎が生きてれば、政治的に本筋にのせられた」と変局を語っている（大島対談、1977、p.40）。このさいの大島は「体力づくり国民会議専門家会議」の議長で、日本体育協会へも率先する協力を要請していたのである。もとより体協が先陣を切ることを期待してのことだが、駄目だった。

東京オリンピックが済んだ後に、スポーツのムードを絶やしちやいかんと思って、（体協実力者の）青木半治氏に、一億総スポーツの看板を掲げろと言ったら、すぐとびついて看板をかけた。中身は何もなしに。（同前 pp.40—41）

前出の1967年大島論文「日本体協のビジョン」の追及した核心である。10年後、官民一体のはずの「体力づくり国民会議」が瓦解情態に陥った。大島が事情の一端を衝く。

政府も福祉との関係で、スポーツ施設を随分作ってはいる。それを整合調整する機関がなくばらばらなんだ。頑迷な中央集権的縦割り行政の中で一貫した政策にそっていない。どうしても強力な調整機関が必要だ。（大島対談、1977、p.40）

他方で1970年代後半には状況も変わる。

日本でも「みんなのスポーツ」が、政府主導でなく市民独自の自己防衛生き残り作戦から、ブームになっているのはいままでになかった。政治も本格的に取り上げる当然の責任がある。（同前）

こうして改めて体協の奮起を期待した。

エリートスポーツはそれなりの社会的意義や文化的な意義を持っている。だが体協が（方策もなく）国民スポーツなんて言うからおかしくなっちゃんだ。（同前）

この「もの言い」も反語なのだから、体協は応えねばならない。大島は、体力づくり国民会議に期待し体協が調整機関として民間を代表すべきだと主張したがゆえに、「ドイツモデル」の履行を率先せよと提唱しつづけたのである。では最大のオリンピックレガシーになりえた歴史的な「国民運動」の瓦解は何故なのか。真因は「マイナス防止」を無視させる幻惑「プラスの増志向」の凝結にある。

TOKYO 1964に際し大島「日本のスポーツ元年」構想が提示した文化的デザインの数々は大綱として現在なお未完のままである。1965年の大島は「学界も文化界も考えてほしい」と発信し、「我国ではスポーツの教育における地位はまだ低い」と断じて「このままでは文化国家といえない」と反省を求めた（伴、2018、p.62）。そのさいの大島宣言「次の世代の担い手である子供、青年のため、日本の政治、経済、教育を動かすのが私の仕事だ」を体育学研究は如何に捉えればよいのか。

10. 結語

1977年対談での大島鎌吉が子供の育成問題を追及して「いまの日本で役割を果たす」のは「新しい意味のスポーツだけだ」と説く。

省みれば、（戦後の）過去20年間、子供たちの遊び場、広場を奪って、大人は工場、駐車場などを造った。一方、学制の六・三・三制の風土の入試システムは、動きたい盛りの子供たちを密室に閉じこめた。一週僅か二～三時間の体育時間では生物学的に見てもこんな現象の起こるのは当然

だった。(大島、1977)

大島の間う「こんな現象」とは「発育盛りの肉体と精神」に心臓病、糖尿病、神経症など「悪魔」が巣食っている実情をいう。検分して「この点、大人たちは、取り返しのつかぬ過ちを犯した」と容赦しない。おりしも大島「体力づくり国民会議専門家会議」議長が最後のアピール「健康体力の増強は国と自治体の責任だ！」をまとめ国民運動が終息へ向かう。時の政権や自治体が「そっぽ」を向いたためである。三年後の大島が実存としての「スポーツの新しい意味」を問いかけた。

スポーツはもともと遊び。その遊びが政治・経済・文化・教育・福祉など人が生きる社会で大きな力となっている。これが80年代の新しい現実だろう。鍛錬とフェアプレイの精神は人間形成に絶対のファクターだなんて教室のお説教は官製の「望ましい人間像」と同じくもうたくさんだ。でなくて、生身の人間生活にとって、何よりも必要な実存として改めて登場してきた。(大島、1980)

実に「生身の人間生活」の問題は19世紀末のクーベルタンが、そしてその半世紀後1947年の大島が追究した案件である。1964年の大島は「20ヵ年計画」を立案し補完すべき付加価値を「教育理念の確立」に求めた。TOKYO 1964から二十年後の1984年10月1日、大島絶筆論文「明日に生きるために思うこと」が食道癌との闘病中に発信された。

いま政治が「教育」について苦悶している。本質的には人間の潜在能力をフルに開発するのが命題だが、政府がかかわりをもつので、官僚支配的で封鎖的封建的なものになる。有識の第三者を選んで委員会をつくっても、文部官僚の期待が原案の下敷きになるためだ。しかも「心身二元論」で「身心一元論」として話が進み難い。(大島、1984、p.47)

斯くしてオリンピック理念に照らして行動すれば「明日の政治」を動かすことができると書き遺す。半年後の1985年3月30日、大

島逝去。この大島最後の問題提起「人間づくり」は如何に進捗しているのか。TOKYO 2020を控え論点ひとつを提示して、点検評価は学界や文化界での議論に委ねたい。

論点はTOKYO 2020の「大会ビジョン」にある。ビジョンは、第一に「スポーツには世界と未来を変える力がある」と期待し、第二にTOKYO 1964は「日本を大きく変えた」ので再来を展望し、第三にTOKYO 2020は「史上最もイノベティブで世界にポジティブな改革をもたらす大会とする」と自負する。しかし第一では、「プラスの増志向」だけでなく、「マイナス防止」にも重心をおいて世界と未来を変える必要がある。第二では、反倫安思考「もう一度省みよう！」を捨て置いてはならない。第三では、本稿の議論で確認したクーベルタンと大島の意志「マイナス防止志向」とは対極にあって、まるで過剰な近代化路線「プラスの増志向」の旗手宣言のように聞こえる乖離(幻惑)に危機感を覚える。

一方でTOKYO 1964の「スローガン」は公募で決まった「世界は一つ」だった。アジアで初開催の「期待と展望」が籠められている。本稿の議論からすれば戦争責任国日本の責務と使命を世界へ表明する「意志と象徴」とも読み取れる。検めるならクーベルタンの意志「オリピックの文化的デザイン」に照らしても日本の発信として含蓄があった。

ここでは大島箴言を反芻するだけにしておく。はたして体育学研究の追究すべき「スポーツの本質」に如何なる関係があるのか。

「近代化路線のプラスの増志向だけを深追いしては駄目だ！ 幻惑のマイナス防止を怠るな！ 怠る倫安を許すな！」

1964年の「6歳」は2020年に「62歳」になる。彼ら「大人たち」の構想したビジョンに欠落があるのなら、これまで半世紀余におよぶ不作為責任は「どこ」にあるのか。学界も文化界もこの問題から逃避してはならない。

引用・参考文献

伴義孝 (1994) : スポーツ思想の誕生—大島鎌

- 吉の周辺一、創文企画。
- 伴義孝（2013）：大島鎌吉というスポーツ思想、関西大学出版部。
- 伴義孝（2018）：大島鎌吉のスポーツ思想に訊く（３）、大阪体育学研究・第56巻（pp.51-64）、大阪体育学会。
- クーベルタン（1935）：近代オリンピックの哲学的原理、大島邦訳書（pp.201-209）。
- Diem edition（1959・大島訳1962）：Pierre de Coubertin Olympische Erinnerungen、Wilhelm Limpert-Verlag、Frankfurt。
- ディーム（1959）：ピエール・ド・クベルタンという人、大島邦訳書（pp.7-14）。
- ディーム（1961a）：スポーツ精神、オリンピア・No.5（pp.2-7）、日本体育協会。
- ディーム（1961b）：オリンピック競技の歴史と意義、オリンピア・No.6（pp.2-10）、日本体育協会。
- フーコー（1975・田村俣訳1977）：監獄の誕生—監視と処罰—、新潮社。
- フッサール（1936・細谷恒夫／紀田元訳1974）：ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学、中央公論新社。本稿参照は1995年刊行の中央文庫版。
- I O C（1994）：国際オリンピック委員会の100年、1994。和訳版著作権者は穂積八洲男（第1章2008・第2章2011）。本稿引用は和訳版「NPO法人オリンピック・アカデミー公式サイトPDF」による第2章。
- John（ドイツ語邦訳者・本書はディーム編集企画・1936）：Olympische Erinnerungen von Baron Pierre de Coubertin、Wilhelm Limpert-Verlag、Berlin。
- 日本体育協会（1965）：東京オリンピック選手強化対策本部報告書、日本体育協会。
- 大島鎌吉（1947a）：スポーツ界の展望（下）、論説記事『毎日新聞』（1月4日）。
- 大島鎌吉（1947b）：死線のドイツ、鱒書房。
- 大島鎌吉（1949）：スポーツと文化、体育・12月号、pp.45-47、金子書房。
- 大島鎌吉（1955）：カール・ディーム博士の人と業績、体育の科学・11月号、pp.426-430、体育の科学社。
- 大島鎌吉（1959）：竹やり精神の選手強化、体育の科学・11月号、pp.485-487、体育の科学社。
- 大島鎌吉（1962）：もう一度省みよう！、東龍太郎編著『オリンピック』（pp.86-87）、わせだ書房。
- 大島鎌吉（1967）：日本体協のビジョン、新体育・1月号（pp.94-96）、新体育社。
- 大島鎌吉（1976）：金メダル15個を宣言、昭和スポーツ史・p.227、毎日新聞社。
- 大島鎌吉（1977）：はちゃ！の驚き、明日への展望、関大・253号、関西大学校友会。
- 大島鎌吉（1979）：野津さんとの出会い、野津謙編著『野津謙の世界』・pp.122-127、国際企画。
- 大島鎌吉（1980）：スポーツの新しい意味、関大・284号、関西大学校友会。
- 大島鎌吉（1982）：「オリンピック平和賞」受賞に寄せて、月刊陸上競技・10月号（pp.173-178）、講談社。
- 大島鎌吉（1984）：明日に生きるために思うこと、体育科教育・10月号（pp.46-47）、大修館書店。
- 大島邦訳書（1962・ディーム編大島訳）：ピエール・ド・クベルタンオリンピックの回想、ベースボール・マガジン社。
- 大島対談（1964）：閑日対談（大島鎌吉×東海林武雄）＝秒読みに入った民族の祭典、経営者・10月号（pp.64-69）、日本経営者団体連盟出版部。
- 大島対談（1977）：現代スポーツ論への試み（大島鎌吉×伊東春雄）、体育科教育・9月号（pp.36-42）、大修館書店。
- （平成30年5月25日受付、平成30年8月12日受理）